

自分らしさを、一針に込めて



やまなか さとみ
山中 里美さん（「第18回キルト日本展」 入賞）

複

数の布から生まれる、知られざるキルトの世界。その一枚の作品が完成するまでには、造り手の技術と長い時間、そしてたくさんの思いが込められています。パッチワークキルト歴約40年になる、山中さんは、2025年キルト日本展で佳作に輝いています。山中さんは、数々の賞を受賞していますが、今でも、作品展に応募する傍ら、指導員として、キルト教室を開くなどキルトの魅力を広く伝える活動を行っています。

ただ、そんな山中さんも、高校2年生までは、一般企業に入社する予定であり、芸術に携わりながら生きていくとは考えていませんでした。高校3年生の時、たまたま入った高校の図書館で運命的な出会いがありました。「田中千代日本最初のデザイナー物語」。一つの分野を追求し、後世に伝えていった田中千代さんのデザイナーとしての生き方を知ったとき、こんなにもかっこいい生き方があるのかと思ってから、その道を歩むことを決意しました。専門学校でのデザイナー学科へ進学することになり、そこでキルトに出会いました。専門学校卒業後は、デザイナーとして働くことになりましたが、デザイナーとして働いていた約15年の間にもキルトを習い、資格も取るなど長く活動してきました。

山中さんが作品作りにおいて昔から変わらず大切にしているのは、「人と違うものを作りたい」「自分の考えているこ

とや表現したいことを型にはめず自由に表現したい」という2つの信念です。他の作家が絵画のようなキルトを作る中、山中さんは「どこから発想を得たのか」と思わせるほど、型にとられない個性的なキルトを作り続けています。

山中さんにとって、キルトは人生そのものです。「キルトがなければ、こんなにも人生が充実していなかった」と振り返ります。親の介護と子育てに追われ、自分の時間がほとんど取れない大変な時期であっても、キルトに向き合う時間を作って取り組んでいました。作業をしているときは余計なことを忘れ、キルトだけに集中できる。限られた時間の中でも、キルトは心の支えになっていました。

「芸術作品に正解はなく、無限の可能性がある」数々の賞を受賞している現在でも、「多くの人に見てもらい、見た人の心を動かせるような作品を作りたい」と、これらの活動への思いを語りました。



▲受賞された賞状の数々
「これから挑戦を続け、さらなる受賞を目指したい」と語りました。